

研究結果

本書の目的は、卸売市場の取引方法を研究対象にして、理論と実践の二つの側面から具体的に農産物卸売市場における取引方法の原理及びそれへの影響要因を分析することにある。研究成果は以下である。

第2章では、野菜を事例にして、中国現段階における卸売市場流通体制の展開過程を理論的に分析した。野菜の需要は既に飽和の状態にあり、1人当たり消費量は既に下降の趨勢になっており、数量から品質を追求することになっていることを強調した。今後、品質、新鮮、栄養、安全及び簡便性などを追求していくと考えられる。第3章では、日本における農産物流通の文献を取りまとめた。特に、生産段階と小売段階における経済規模の拡大及び輸入農産物の増加によって、日本の市場体制の展開は重要な転換期にある。こうした状況の下で、セリ取引制度を含める卸売市場流通体制の改革に学界から大きな関心が寄せられている。その一方、地域農業振興と高付加価値追求のため、多くの農家はものを持参して直売所で農産物の販売を行っているなどを紹介した。

第4章では、中国における農産物流通の文献を取りまとめた。経済の急速成長に伴って、流通分野に関する研究が多くて、セリ売りに対する認識が異なっている。と同時に、卸売市場における取引方法に関する研究について、多くの研究者は規範的な方法を用いて、実証研究と計量経済学的手法を持つ文献が殆どないことは現状である。

第5章では、相対取引の下での顧客関係の重要性を実証・理論的に分析した。第6章では、具体的なデータを用いて、顧客関係への影響要因を析出した。第7章では、調査したデータを用いて顧客関係が中間商人の経営効果と投入財への影響を分析した。

第8章では、現存の卸売市場取引方法に関する理論的文献を取りまとめた。主な研究は藤谷（1963）、王志剛と祝倩宜（2006）、福井清一（2000）及び浅見（2004）などである。第9章では、中国国内の雲南昆明花きセリ売りセンター（KIFA）、新圳福田農産物卸売市場及び北京市菜太花き卸売市場におけるセリ売りについて事例研究を行った。また、その後ろの二つの卸売市場のセリ売り中止の原因を分析した。第10章では、北京市における卸売市場で行ったアンケート調査データを用いて、中間商人のセリ売りへの認知程度、態度及び選択の意欲について実証分析を行った。結果として、中間商人がセリ売りをあまり知らないこと、殆どそれを採択する意欲が高くないことが得られた。したがって、セリ売りの取引方法が中国で採択されることが難しくなることが示されている。第11章では、調査データを用い、標本選択の両変量 probit モデルを援用して中間商人のセリ売り取引方法に対する態度と採択意欲を定量的分析した。その結果では、安定した買い手と従業時間は長いほど、中間商人はセリ売りに対して肯定的な態度を持っており、セリ売りが有効的であることが分かった。第12章では、福田卸売市場において取引に参加した5つ野菜の価格データを用いて、そのセリ売り価格と会いたい取引価格のリンケージを分析した。その結果として、大根と白菜のそれら価格間の関係があるが、ほかの青瓜、ピーマンとトマトのそれら価格の間の関係はないことが分かった。これは、ある程度、同市場の市場効率性が低いことを示しており、2005年末同市場におけるセリ売りの中止につながったものと考えられる。

第13章、第14章と第15章では、日本、韓国と中国台湾における現行の卸売市場流通体制をそれぞれ紹介した。卸売市場法律の制定、現実を見てセリ売り取引方法を積極的に導入すること、流通施設の整備、流通組織の設置及び残留農薬の検査体制の整備などを示唆している。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

農産物卸売市場における取引方法の選択：理論と実践、王志剛、中国農業科学技術出版社、2009年6月。